

沖縄県における日本語教員養成について — 沖縄国際大学を例として —

Teacher Training of the Japanese Language in Okinawa A Case of Okinawa International University

尚 真貴子 Makiko Sho

沖縄国際大学 Okinawa International University

【キーワード】 一体化した教育、日本語バイリンガル教育、多様な機会、海外日本語教育実習、地域との繋がり

はじめに

多様化する日本語教員養成の在り方の中で、沖縄県の大学における日本語教員養成課程がどのように行われ、地域や海外との繋がりがどのようにになっているかを沖縄国際大学（以下、沖国大）の例を挙げて述べて行く。

1. 沖縄県における日本語教育

文化庁の平成 23 年度国内の日本語教育の概要の都道府県別日本語教師養成・研修機関・施設等の調査結果によると、日本語教師を養成している機関は沖縄県全体で 5 機関あり、常勤教師の中で専任教師が 11 人、兼任教師が 14 人となっている。また、実際にはボランティアはいると思われるが、ボランティア数は、ゼロと報告されている。地域で日本語を学習したいという希望者が増えている状況であるのにも関わらず、ボランティア不足、養成講座の不十分さが窺える。また、日本語教育コーディネーター数もゼロとなっている。教師養成を受講している数は、219 人である。九州地区の中では、日本語教師養成を担当している常勤講師数はそれほど多くはないが、受講者数は福岡県の次に多い数字となっている。この結果から、沖縄県の場合は、受講者数は多いが、教師、ボランティア、コーディネーター等の人材不足だと言えよう。

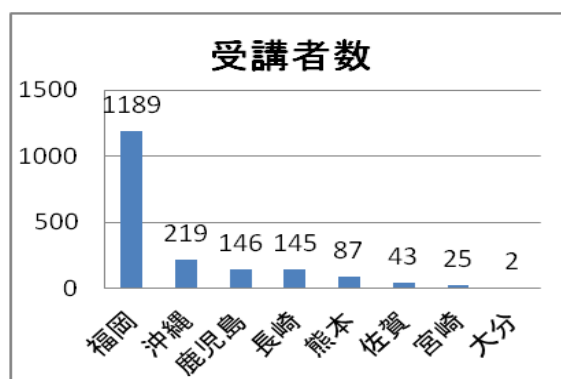


図 1：日本語教師養成の受講者数

沖縄地域留学生交流推進協議会の平成 22 年 5 月の報告によると、沖縄県における外国人留学生数は 576 (女子 280) 人となっている。地域順に中国 287 (女子 149) 人、韓国 49 (女子 29) 人、台湾 36 (女子 23) 人、インドネシア 33 (女子 10) 人と、やはりアジア地域の留学生が多いことがわかる。

日本語教育検定試験に関しては、沖縄県で受験が可能となるよう要請を出しているが、現在に至るまで行われていない。一番近い福岡県まで受験に行くにしても、時間的にも金銭的にも学生にとっては負担がかかるため、早い段階で沖縄県での受験が可能となることが強く望まれている。全国日本語教師養成協議会（全養協）の日本語検定試験は、沖国大が受験実施校としてスタートして今年度で 3 回目になるが、まだ受験者は少ない。実践能力のある日本語教師が望まれている昨今、積

極的に様々な検定試験にも取り組める環境を整えることも重要だと思われる。

沖縄県では、3 大学（琉球大学、沖縄大学、沖縄国際大学）が持ち回りで、年に 3 回、大学、日本語学校、専門学校等で日本語教育に携わっている人々との研究会を開催している。そこでは、日本語教育、教師養成等に関する発表や実践報告、意見交換を行っている。時には、日本語教員養成コースの学生及び大学院生が論文を発表する貴重な場にもなっている。

2. 沖縄国際大学における日本語教育

沖国大における日本語教育は、日本文化学科と英米言語文化学科の両学科に日本語教育副専攻課程が設置され、日本語教師養成がスタートした。今年度で約 20 年になる。日本文化学科と英米言語文化学科にそれぞれ 1 人の専任教員がおり、日本語教員養成の科目群と留学生のための日本語クラスを同時に担当している。教員養成と留学生教育の内容を十分把握することにより、運営がスムーズに行われ、一体化した教育に結びついており、大変恵まれた環境にあると言える。

表 1 は、沖国大の日本語教育副専攻課程のカリキュラムである。沖国大では日本語文法、日本語の音声、文字・表記、言語史、などの言語に関わる領域の理論面、そして、日本語教材研究、さまざまな教授法、指導案の作成方法など実践面での教育にも力を入れている。特に日本文化学科は、2013 年度から多文化間コミュニケーションコースを設置し、ジャパノロジーや言語文化接触論などの科目を開講する予定である。国際化が進む中で、文化を越えて発信していく姿勢や感性を磨き、グローバル時代にふさわしい文化の多様性の理解を深め、その発信方法を学んでいく日本語教師を目指している。

2.1 日本語バイリンガル教育

沖縄の日本語教員にとって必須項目なのが、全国共通語と地域共通語を理解して使い分けがで

きる能力を持つことである。全国共通語と沖縄地域共通語を理解して留学生に教えることができるようにという趣旨で、沖国大では、授業内に「日本語バイリンガル教育」を取り入れている。

表 1：沖国大の日本語教員資格取得関係科目

領域	授業科目名	単位	年次	日文	英米		
言語に関わる領域	日本語学入門	2	1	必4単位	選択必修10.単位		
	日本語表現法演習Ⅰ	2	1				
	日本語表現法演習Ⅱ	2	1				
	日本語文法基礎Ⅰ	2	1				
	日本語文法基礎Ⅱ	2	1				
	日本語現代文法Ⅰ	2	1				
	日本語現代文法Ⅱ	2	1				
	日本語学概論	2	2				
	日本語文法論Ⅰ	2	2				
	日本語文法論Ⅱ	2	3				
	日本語学概論Ⅰ	2	2				
	日本語学概論Ⅱ	2	2				
	社会・文化・地域に関わる領域	ジャパノロジーⅠ	2	2		選択必修4単位	選択必修4単位
		ジャパノロジーⅡ	2	2			
言語文化接触論Ⅰ		2	3				
言語文化接触論Ⅱ		2	3				
異文化理解Ⅰ		2	3				
異文化理解Ⅱ		2	3				
教育に関わる領域	日本語教材研究演習	2	2	必修10.単位	必修10.単位		
	日本語教授法演習Ⅰ	2	2				
	日本語教授法演習Ⅱ	2	3				
	日本語教育実習Ⅰ	2	3				
	日本語教育実習Ⅱ	2	4				

沖縄の人々が全国共通語だと思って話している地域共通語には意味がずれて使われているものもある。たとえば、「このはちみつ、むちやむ

ちやする（このはちみつべとべとする）、「布団をかぶってねる（布団をかけて寝る）」、「この本あんにくれるよ（この本あんにあげるよ）」、「ひざまずきする（正座する）」、「やがて、事故になるところだった（あやうく事故になるところだった）」などである。他にも 沖縄では、根拠の弱い場合でも「来るはずです」と言い、これを聞いた他府県の人は、必ず来ると思って 30 分以上も待っていたとか、お昼休みになって「お弁当買ってきましょうね」と言って出ていったので、他府県の人は、私の分まで買ってきてくれるとは、なんて親切な人だと感激していたら、その人は、自分一人分のお弁当を買ってきてさっさと食べ

ているのに びっくりしたという話も実際にある。このように使用の違いに気付かない学生が沖縄にはいるため日本語バイリンガル教育は必須となっている。

2.2 多様な日本語教育実習

沖縄大には多様な日本語教育実習の機会がある。留学生のための日本語初級、中級、上級クラスがあり、中級クラスは日本語作文、日本語聴解・会話、日本語文法、日本事情のほか、沖縄的な特徴として、地域文化を学ぶための「沖縄事情」のクラスもある。上級クラスの場合は、CALL 教室（パソコン教室）を使用しており、IT 情報整理能力や技術力を身につけるチャンスにもなっている。

まず、日本語教育実習生は、初級、中級、上級レベルのクラスの授業見学が行える。授業見学を行う際は、毎週希望者に日時、科目名を登録してもらい、担当教師へ連絡を入れ、前もって授業見学の準備をして臨むことになっている。授業見学を行うことにより、授業の流れ、教師の発話の仕方、留学生の様子、教室内でのインターアクションなど、観察力や分析力を伸ばせる。このように、自分が担当する科目の授業見学等を数回終え、担当の先生の指導により、教案を仕上げ最終的に沖縄大の日本語クラスで教壇実習を行うことになる。また、学内での教壇実習の他に、チューター制度を設けて進捗についていけない学生へのアシストや日本語能力検定試験 N1 や N2 などの対策の手伝いなどもしてもらっている。漢字の補講クラスの担当などの経験もできる。非漢字圏の学生へ漢字の書き方、音訓読み、意味、熟語などをどう教えるかということが実際に経験できるので、大変良い機会となっている。

その他に、地域文化を学ぶための「沖縄事情」のクラスでは、課外地域学習として沖縄県の世界遺産の場所、博物館など歴史・文化体験も行っている。その際、歴史関係の案内人の説明には難しいところもあるので、日本語教育実習を留学生の



図 2：日本語バイリンガル教育

側につけて、わかりやすく説明してもらっている。課外活動で一緒に行動することによって、授業内だけの留学生の様子とは違った一面がみられるチャンスとなっている。さらに、毎年行われている学内の留学生による日本語スピーチコンテストでは、作文の添削、発音チェック、コンテストの運営、進行、審査員、そして、スピーチの冊子作成など、一連の教務作業も経験することができる。

3. 海外日本語教育実習

地域と海外を繋ぐ日本語教育として、沖国大では、学内での教壇実習の他に、2004年度からは中国で、2005年度からは台湾で海外実習が可能となっている。基本的には、渡航費、実習費等は個人負担で、年平均3～5人くらいの参加となっている。2010年度より、国際交流基金の「海外日本語インターンプログラム」に採択され、学生の実習費の負担軽減になっており、海外での実習の一部を負担してもらうことにより、希望者が年々、増えてきている。

次に、海外日本語教育実習の流れについて述べたいと思う。実習を行う際に、事前学習として実習先の言語を沖国大の留学生に教えてもらったり、歴史、地理を学習したりする。また、日本や沖縄に関することも調べて準備しておく。台湾での日本語教育実習の場合は、渡航前から実習を担当してもらう指導教官とメールでのやりとりをし、教案の作成を行ったりしている。現地では、オリエンテーション、担当予定の授業見学、指導教官の丁寧な個人指導による教案作成、そして、教壇実習となっている。文法、読解、会話、聴解などのクラスでの実習の他に、日本や沖縄についての紹介もしている。実習終了後には、全担当教員からきめ細かい指導及び評価を受ける。海外実習では、日本国内では経験できない海外の日本語教育の現場を知り、ニーズに合った具体的な日本語の教え方を学ぶことができる。また、国際交流

を実際に体験し、国際感覚を身につけ、日本語を客観的にとらえることができるようになる。

このように、地域と海外を繋ぐ日本語教師養成のために、海外実習は貴重な機会となっている。異文化適応能力、新しい需要に応じうる資質や能力や知識を身に付け、実践力を伴った日本語教師を養うためにも海外実習は効果的なものと言える。

3.1 海外で活躍する日本語教師

沖国大は、協定校であるマカオ大学に毎年、日本語インターンを1人派遣している。また、中国で海外日本語教育実習の経験をした学生の中で、2年間採用された学生もいる。一握りではあるが、中国、台湾、ベトナム、タイ、アメリカ等、海外の日本語教師として活躍の場を広げている者もいる。青年海外協力隊（JICA）、日系青年ボランティア等を通して、日本語教師となった者もいる。協力隊などを終えて帰国した学生たちを沖国大に招き、日本語教師を目指している学生に日本語教師になったきっかけ、協力隊としての活躍、現地の様子などの報告をしてもらい、質疑応答なども行っている。それらのことは、学生の希望や励みとなっている。その他、卒業した留学生が日本語学校を開校し、そこへ沖国大の日本語教員の資格を取得した学生を毎年、何人か送るというシステムもできている。わずかではあっても、海外での活躍の場、就職先を提供できることによって日本語教師への夢や希望を実現させる手助けとなっている。

4. 地域との繋がり

地域との繋がりとしては、沖縄県内には、8校の日本語学校があり、沖国大の日本語教育副専攻課程の学生を、ボランティアとして、会話パートナー、作文の添削、その他アシスタントとして送っている。また、市の日本語支援の必要な児童・生徒に1週間に1回、決まった曜日に日本語指導ボランティアとして派遣している。児童・生徒つ

まり、年少者の日本語教育を充実させることも今後の課題となるであろう。また、地域には生活者としてのさまざまな国から来た外国人も存在する。そのためのゆんたく・サロンは、地域の生活者としての外国人が日本人と「ゆんたく（おしゃべり）」を楽しみながら、お互いに学び合い交流をする場となっている。そこに沖国大の学生もボランティアとして参加し、幅広いコミュニケーション能力を育成するために役立てられていると思われる。さらに、県外の高校での常勤講師、県内の日本語学校での専任講師、あるいは非常勤講師としてキャリアに結びつけているものもある。

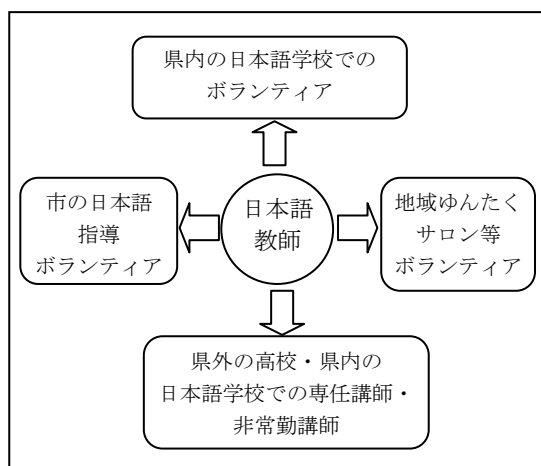


図4：地域との繋がり

5. 今後の課題

沖国大で開講されている日本語クラスと海外の大学で実習を行っているが、総体的に教壇実習の時間数はまだまだ少ないと言える。実践的な日本語教師を育てるためにも実習の回数を増やしていきたいと考えている。それによって、様々な場所で就職できる機会を広げることに繋がられるのではないかとと思われる。また、沖縄県は、地域の日本語ボランティアや、外国人とのコーディネーターになる人材が十分育っていないのが現状である。外国人に対する理解不足の面があり、今後は、外国人児童・生徒も含め、外国人への日本語学習の支援、交流、そして、住みやすい地域

づくりを目指すためにも、地域のキーパーソンの育成は必要となると思われる。言語や文化的背景、そして、日本語学習環境や目的の多様な地域在住の外国人が社会の様々な分野に広がっている。地域における日本語教育のニーズも多様化しており、その特性や現状に

適応しうる人材の育成が必要となってくると考えられる。「生活者としての外国人」を対象とする日本語教員の養成や研修を意識した教育も考えていかなければならないであろう。これからは、多文化コミュニケーション能力を身に付け、多文化共生社会に対応した日本語教師の養成を目指していきたいと考えている。

参考文献

- 大城朋子・尚真貴子（2005）「海外日本語教育実習の試み」『大学日本語教員養成課程研究協議会』
- 大城朋子・尚真貴子（2007）『元気だはずよ！ー日本語教師をめざす「うちな〜んちゅ」のための日本語バイリンガル練習帳ー』沖縄国際大学日本語教育教材開発研究会
- 沖縄県地域留学生交流推進協議会（2010）『沖縄地域の留学生』
- かりまた しげひさ（2006）「沖縄若者ことば事情ー琉球・クレオール日本語試論ー」『日本語学』January vol.25,50-59
- 高江洲頼子（1994）「ウチナーヤマトゥグチーその音声、文法、語彙についてー」『沖縄言語研究センター研究報告 3』245-289
- 文化庁文化語部国語課（2011）『平成23年度国内の日本語教育の概要』